

能登半島地震被災地より 当院DMATの第1次隊が帰院

【概要】

令和6年1月1日（月）に発生した能登半島地震の被災地より、岐阜大学医学部附属病院DMAT（災害派遣医療チーム）の第1次隊が5日（金）夜に帰院しました。

同チームは、医師2名、看護師2名、業務調整員（薬剤師）1名で構成され、派遣要請を受けて2日（火）に出発し、公立能登総合病院、市立輪島病院等で医療活動を行って来ました。今回、5日早朝に出発したDMAT第2次隊が現地到着したことに伴い、引継ぎを終えて1次隊が帰院したものです。

【DMAT隊員からのコメント】

吉田（隆）医師：「先陣として、安全を担保しながら災害支援を行うことがいかに難しいことか、改めて感じました。被災された方々に寄り添うことは重要ですが、目前のことだけに捉われない、攻めの活動方針が、時には重要であると学びました。母校の後輩が必死に頑張っている姿には、感動させられました。」

福田（哲）医師：「被災地域に向かうことの危険性を感じずにはいられない派遣でした。また病院機能を地域に寄り添いながら維持することの大変さを痛感いたしました。」

白木看護師：「身の危険を感じる活動でした。災害看護の遂行の難しさを痛感いたしました。」

山岸看護師：「近隣組織との普段からの交流が、人や物がいない中での協働活動を支えていると、改めて感じる派遣でした。また、迅速かつ十分な活動の難しさを認識させられた4日間でした。」

鈴木業務調整員（薬剤師）：「被災者でありながら、病院機能を維持するために必死に仕事されている職員の方々をおいて、短期支援で戻ることには複雑な思いでした。また、被災者自らが復興をはじめている姿を目にして被災地域で生きることの厳しさを感じました。」

活動を終了したチーム員へは、病院長から労いの言葉が述べられました。
岐阜大学医学部附属病院では、今後も引き続き支援を行っていく予定です。



5日夜、DMAT第1次隊が帰院



5日朝、DMAT第2次隊が出発